

猿蟹合戦の變遷

小池藤五郎

昭和八年九月十一日の讀賣新聞には、大體に次の様な意味の記事が載つてゐた。

幼い學童の頭に脅迫や復讐の殘虐な思想を植ゑつける言ふので、教育界の重大問題となつてゐた小學校尋常一年の「國語讀本、卷二」の中の「サルトカニ」の話は、文部省で輿論に鑑み、慎重研究を重ねてゐたが、今度愈々改正する事になつた。それは改正した「小學國語讀本、卷二」では、「サルトカニ」の話の筋を、前回はまるで違つたものに改めて、來月十日から全國各小學校で一齊に使用せしむる事になつた。改正の主な點は、舊讀本に、

「ハヤクメヲダセ、カキノタネ。ダサヌトハサミデハサミキル。」

こあるを、

「早くメヲ出せ、早くメヲ出せ。」

こ改めて、脅迫がましい態度を除いた事が第一である。次に前には猿が青い柿を蟹に投げつけて叩き殺す處を、新讀本ではちよつと怪我した程度にミヅめた。子蟹が蜂や白なぎの友達の助けによつて、親の仇を討つところを、今度は、

「サルハ、トウトウ、ジブンガワルカツタトアヤマリマシタ。カニハ、ユルシテヤリマシタ。」

こ改めて殘虐味を一掃した。

これに就いて佐野圖書監修官は次の様に語られた。舊讀本の「サルトカニ」は馬琴の「燕石雜誌」から取つたもの、新讀本

は徳川時代の作者不明の作「ひなのうけぎ」から材料を得たもので、いづれもそれ／＼據り處がある。今度の改正で問題の點を除いたから、もう非難されるやうなことはあるまい。

この記事が現れた後に、各新聞は一齊にこの問題に就いて書きたてた。一例を九月十三日の東京日日新聞に取つて見る。「果然問題になつた『猿蟹合戦』の改作」

見出しで、文部省の圖書局談、久留島武彦氏談、田中寛一氏談等を五段に渡つて載せてある。文部省の圖書局談は、述の佐野監修官談と大體に似たものであり、田中寛一氏の談は、「あながち復讐的な傳説とはいへない」の見出しで、緩和した内容にしようと言ふのは結構であるが、それが爲に童話の内容を子供にまつて餘り興味の無い物にする改悪なので、訂正する場合には注意しなくてはならぬ(省略して記載した)。

意味を述べられた。久留島武彦氏は

猿蟹合戦の話は、も／＼猿さいふ意地悪な横暴な強者が、蟹と言ふ善良な弱者を食物にするので、弱者が立つて、悪い強者をこらしめると言ふのがテーマで、單に復讐とか仇討以上の大きな意味がある。猿が蟹を殺すのも、大人が考へる程子供には残忍ではなく、こんな事を問題とするは、児童心理を考へない人の主張である。「ハサミキル云々」の歌は本當の猿蟹合戦ではなく、近世になつて誰か作つたものである。文部當局が言はれる盲學校の話も、この歌の「メナダセ」が問題になり、盲人に取つてはつらい文句だと言ふ反對したのみで、話全體に對する反對ではない。古來から傳はる童話は、神話と同じく民族心理に重大な關係を持つてゐるので、後世の書物なごから引つぱつて勝手に改作するは面白くない。

主張して、改作には反対してゐる。此の外の各新聞の記事は割愛するが、兎に角この改作問題は時事問題として人々の關心を刺戟した。

文部省當局の談を除いては、前述の人々の考へ方は、猿蟹合戦の現在の形を唯一無二の物と考へ、この話がこんな變遷を経て今日に至つたかに注意してゐない。又、文部當局談でも、「燕石雜誌」に據つて書いた前の話を、「ひなのうけぎ」に記されてある話に據つて後の話に改めたと言ふ程度であつて、甚だ物足りない。「燕石雜誌」は曲阜馬琴の隨筆で、文化八年に刊行した物、「ひなのうけぎ」は文化頃の隨筆で、私が所蔵してゐる「鳥傳日本魂復古酒乳」(賀茂規清の原稿本)の末尾に、「瑞鳥園著述目錄」にして「雜酒字計木」を載せてゐる事から、「ひなのうけぎ」が賀茂規清(瑞鳥園)の著述である事は明白である。いづれも百四十年にも足りない昔に書かれた物に過ぎない。

この外に黒澤翁滿の「童話長編」(隨筆、安政四年刊行)、喜多村信節の「嬉遊笑覽」(隨筆、文政十三年自序、明治三十年初版)、山東京傳の「骨董集」(隨筆、文化十一・十二年刊行)等に猿蟹合戦の記事があるが、いづれも大したものではない。問題となつた當時の新聞を見る時、其の改作の是否を論ずる人々の多くは、これ等の記録を精査した上ではなく、多くは思ひ附によつて論じてゐる事と判断せざるを得ず、重大な國民童話が、かゝる取扱を受けてゐる事に歎かれもした。

この論争が下火になつた頃であつた。思ひあまつた私は、今から二百五十年以前の元祿頃に行はれてゐた猿蟹合戦の話が、「さるかに合戦」(西村重長筆)として、稀らしくも岩崎男爵の文庫中に存在する事と、結果から見ると、文部省の改作は「ひなのうけぎ」どころか、元祿頃の猿蟹合戦の純粹の古形態にかへつたもので、其の暗合の不可思議さに驚く旨を佐野監修官に御話した。そして望まれるまゝに、自己の調べてゐた處を纏めて差出した。佐野監修官は「これで改作に就いての確信を得た」と喜ばれ、「教材研究」(昭和十一年一月、第三卷第一號)上に、

童話「サルトカニ」に就いて

の題目で其の事を書かれた。

一體「猿蟹合戦」はどんな變遷を経てゐるであらうか。口傳へばかりになつてゐる話は、年代の経過によつて次第に變化し、何時頃にどんな筋で話されてゐるか明瞭でない。併しそれが何かの機會で記録されるこゝの時代にはどんな形で話されてゐるか明瞭になる。

猿蟹合戦の記録を捜して、出来るだけ昔に溯つて見るこゝ、行成表紙本に「猿蟹大合戦」(五丁物一冊)の書名がある。これは元祿以前の話の記録らしいが、たゞ書名だけで未だ實物に捜し當らない。その次に古い物は、前に述べた西村重長筆の「さるかに合戦」(刊行は享保の初年と推定、赤本、五丁物一冊であつて、今から約二百三十年位昔の話である。

〔梗概〕昔々の事、山の猿は御所柿の種を、澤邊の猿は焼飯を拾ひ、お互に交換し合つた。猿は山の上へ柿の種を植ゑて、「なれくならずばはさみ切らん」と言つた。柿の木は「草木心なしさいへぎも」一夜のうちに大木となり、澤山柿が實つた。蟹は柿を取らうとするが、樹へ上る事が出来ないで、眺めてゐるこゝ、其處へ猿が来て、取つてやらうと言つて木へ登り、旨い柿は自分達(複数)が食ひ、澁柿を蟹に投附けた。蟹は怪我をして床についた。蟹の枕元で、蜂・庖丁・たて白・めくら蛇・あらめ・てきね・玉子・白なきが、蟹の依頼によつて猿退治の相談をする。猿はそれさも知らずに蟹をたづねて來、蟹に向ひ合つて圍爐裏の火にあたらうこした處、玉子が火の中から跳ね出て、猿は火傷をした。火傷に水でも附けようとするこゝ、手桶の中には庖丁が待つてゐた。蟹・蜂・あらめ・てきね・庖丁・玉子なきが協力して猿を捕へ、白は猿の上に乗つて押へ附けた。猿は「さうでもしろかなわぬぞ」と悲鳴をあげた。玉子は「もうゆるしてやらつしやい」と言つた(引用文は原文通りであるが、諸所に漢字を當嵌めて置いた。以下も同様)。

右の梗概で知られる通り、焼飯と柿の種を交換する際に猿は、

「うまそうな焼飯の。此柿のさねを取かへて下さい。しかもこれは御所柿の種、これを植へて柿が出来たらおれにくれやうしやう。」

と申込んで、それに答へて蟹は、

「やすい事、かへてしんじよ。」

と同意し、更に猿が、

「柿が出来たらおれにくれさつしやう。」

と言ふに答へて、蟹は、

「いかにも〜。」

と承諾してゐる。この話は當時口碑にあつた猿蟹合戦を其の儘記録したらしく、こんな筋で語られてゐた事が知られる。前に私が文部省の「小學國語讀本、卷二」の「サルトカニ」は、猿蟹合戦の純粹の古形態にかへつたものであると述べたのはこの爲である。其の際の論者の多くが價值を認めた所謂仇討式の猿蟹合戦は、大體に於て、文化・文政頃の小説に敵討物が流行し、それが猿蟹合戦にも取入れられて語られた結果であつて、話の展開からすれば、それは猿蟹合戦の本來の物ではない。

寶曆三年、文豪の曲亭馬琴が「燕石雜誌」を出版した年よりは五十八年前、に出版された小説（桃太郎物語）の中に、猿蟹合戦の話が取入れられてゐる。

〔梗概〕海邊で一匹の蟹が柿の種を拾ひ、それを植ゑるに、急に成長して柿の實が澤山になつた。蟹は木へ登れないので

猿にもいでもらふに、猿は木に登つて、自分だけ旨い柿を食べ、大きな柿を枝ごみにドサツミ落した。蟹は運悪くこれに當つて甲羅を碎かれて死んでしまつた。蟹の子は、栗の毬・立臼・あらめ・牛の糞其の他の者を頼んで味方とし、猿の洞穴へ尋ねて行つた。穴の入口には牛の糞が頑張つてゐて、外から歸つて來た猿が、それに滑つて倒れた處を、皆で討取つた。

これが所謂仇討式の猿蟹合戦の最も古い物で私には思はれる。小説の中に挿入されてゐる小話であるので、勿論、當時の口碑を其の儘に記入したとは思はれず、作爲の跡も認められる。これには、猿を滑らせる物が下品な物になつてゐる、柿の種と焼飯の交換、猿の火傷などの重大な部分が缺けてゐる。

「燕石雜誌」に書いてある猿蟹合戦の筋は紙數の都合で省略する。この話では、猿が目前の慾に迷つて柿の種と焼飯を交換した事にしてある。猿が木の上から澁い柿を蟹に投げてやつたが、勿論投附けて殺す意味はなささうである。併しながら蟹は、澁柿が甲に當つて重傷を受けたらしく、「燕石雜誌」には「得起きず」を記すのみで「死せり」は記さない。併しながら前後の關係で死んだと取れるのである。終になつて、蟹の同情者で猿の一族との大合戦になるに、今迄の猿が急に猿の王と言ふ意味になつてゐる。即ち、焼飯と柿の種を取替へた猿蟹は兩者の代表者の格で、「燕石雜誌」を熟讀する時には、この出來事は猿王・蟹王の間に起つた事の様にも思はれる。不思議な事には、一匹の猿と一匹の蟹の争が、急に猿と蟹の一族間の鬭争となり、それが又、猿の王が蟹の穴を訪れる時から、突然に、猿の方だけが一匹になつてしまひ、蟹の方には依然として蜂や玉子などの味方がある。この様な點は充分考ふべき處で、古い形の猿蟹合戦の話根の痕跡の様に私には思はれる。

賀茂規清の「雑酒字計木」の筋も紙數の關係で省略する。この話と「燕石雜誌」所載の話とを比較するに次の様な點が注意

される。

(一) 柿の實をもぐ處で、猿は旨い柿を腹一杯食つた上で、木から下りて來て蟹を打擲してゐる。この點が「燕石雜誌」の話にはない。

(二) 「燕石雜誌」の話では、猿と蟹が戦争を始めてから、曰・杵・蜂・鶏卵・あらめ等が加勢するが、この話では柿をもぐ時から蟹が蟹に同情してゐる。

(三) 「燕石雜誌」の話では火傷の場所は腕であるが、此の話では猿の尻である。

(四) 「燕石雜誌」の話では、猿を杵・曰・あらめ其の他で捕へる事になつてゐるが、此の話では曰一人で捕へてゐる。

(五) 「燕石雜誌」の話では計略をもつて猿の王を誘ひ寄せるが、此の話では猿の方から柿が欲しくて、蟹の處へやつて來る事になつてゐる。

(六) 「燕石雜誌」の話では猿は殺されるが、此の話では、わびて命を助けられてゐる。

一々の説明を省くが、文部當局が「燕石雜誌」を去つて「ひなのうけぎ雑字計木」に據つた事は、斯うした兩説話の比較から見ても喜ぶべきである。若し「さるかに合戦」を考慮に入れる時、この改作が、仇討に毒されない元祿の古形態に復歸した點で、非常に慶賀すべき事である。

「さるかに合戦」には猿が三匹書かれ、蟹も複数となり、「まめ蟹」三言ふ蟹まで書かれてゐる。火傷の時に後の話では糠味噌を附ける事になつてゐるが、「さるかに合戦」は水ミしてあるなごも一番素朴である。併し「あらめ入道」が切口上で、「あらめんごうな猿めだ。拙者は庭にひかへませう。」

ミ述る滑稽なごも認められる。

私の調べた處では、これより古い猿蟹合戦の史料で、纏つた物は未だ見當らない。以上述べた處を一括して猿蟹合戦のより古い形態を考へて見よう。

室町時代の小説に、魚類しやうじゆんもの精進物の戦争を描いた「精進魚類物語しやうじんぎよものものがたり」(御伽草子)があり、鴉からす・鴉からすの戦争を取扱つた「鴉あろ合戦物語」がある。其の作者は關白一條兼良つねよしと言はれてゐる。猿蟹合戦もこれ等と同様に室町時代に成立した話らしく、其の始の形は、猿の眷族くわんしゆと蟹の眷族の戦争物であつて、どちらが善く、どちらが悪いと言ふ様な道德的に明瞭な區別はなかつたらしい。事件の發端は柿の實をもぐ所にあつたらしく、兒童の最も喜ぶ柿の種かきいを焼飯の取りかへつこの場面は、後に附け加へたものかと思はれる。結局猿の一族と蟹に味方する者で戦争したが、遂に和睦し、天下泰平になつたと言ふ筋である。この話も古くなる程、「澤蟹さわかかにはさみの介すけ」か「熊蜂くまはちさし右衛門」など、言ふ姓名が現れ、猿も「八兵衛」など呼ばれる點なき、それは全く「精進魚類物語」・「鴉合戦物語」などの作中に見へる姓名の附け方と同一である。

この様な簡単な話が、長い年月に渡つて人の口から口へ語り傳へられてゐるうちに、弱い蟹には人の同情心が集り、猿のやうに單獨にしてしまはず、兒童の生活に割合に近い關係の、栗・玉子・蜂・蛇・庵丁・きね白・あらめ・牛の糞等をそれぞれの場合に味方してゐるらしい。猿が蟹をだましたとか、弱い者をいぢめたり、眼前の慾に迷つたと言ふ様な道德的の意味、戦争から復讐へ、復讐から典型的な仇討へ、時代を經過するにつれて變遷して來たものらしい。

猿・蟹の争の原因に就いては、猿と蟹で餅搗をしたとか、共同して田を耕してゐたとか、地方によつて色々異つた話を傳承してゐる。猿蟹の焼飯と種の交換は、「古事記ふるこじ」の海幸彦うみさいびこ・山幸彦やまさいびこに據つたさする説や、南洋の島の或民族の持つ話に類似するなきを始めとして、其他に諸説があるが、多くは現在の猿蟹合戦の話が、昔から變化なく傳へられてゐる事を前提として立論してゐる、従つて其の根柢に誤謬が認められる。

猿蟹合戦が日本の小説中に取入れられ、文學的に色々變形させられてゐる。

丹波の國に猿右衛門と言ふ狩人ミ、蟹藏と言ふ飛脚が住んでゐた。「かに藏さこへ飛脚だ。」ミ猿右衛門が尋ねるミ、「猿右衛門久しぶりだ。わしや都へ飛脚にいきます。なんぞ金になる事はないかの。」なまゝ二人は話してゐる。それからしばらくして、猿右衛門は狩に出て深い谷に落ち込んでしまつた。谷から出る事が出来ずに困つてゐるミ、一匹の大猿が助けて谷から引上げてくれた。一方、飛脚に出た蟹藏は、山道で休んでゐるミ、蟹が小判を缺ではさんで出て来て、小判の蟲干をしてゐる。蟹藏はこれを見て喜び、其のうちの五十兩をそつミ失敬してしまつた。そして此の金子を資本にして酒屋を開業した。一方狩人の猿右衛門は命を救つてくれた大恩ある大猿を銃殺して、それを百兩で賣つて、その金を資本として兩替屋を始めた。弘法大師は諸國を御まはりになり、猿右衛門の門口に立つミ、猿右衛門は妖術を遣ふ坊主と思つて、箆で打擲した。弘法大師は猿右衛門の店の番頭喜八の父親の喜右衛門方に宿つた。弘法大師は喜右衛門の息子の喜八に米粒を與へて、これを主人の猿右衛門ミ、隣の酒屋の蟹藏に壽命の藥になるミ言つて飲ませよミ教へた。喜八の言葉信じて壽命の藥と思ひ、米粒を飲んだ猿右衛門は、本物の猿になつてしまつた。蟹藏もこの米粒の爲に本物の蟹になつてしまつた。澤のほりりで、弘法大師は蟹藏が變化した蟹に燒飯を與へた。猿右衛門が變化した猿は御所柿の種を持つてゐる、蟹は燒飯を猿の種ミ交換した。蟹は御所柿の種を植えた。柿の木は成長して實がさつさりなつた。この柿を取る時に、蟹は猿に蒞柿を投附けられ、それが原因で病氣になつた。白右衛門、杵の入道、あらめ次郎、玉子ふわの丞なきは、蟹に同情し、猿をひきい目にあはせて復讐をした。これは實は猿右衛門ミ蟹藏の夢であつて、二人は同時に同じ夢を見た事に驚き、弘法大師の前で今までの悪行を懺悔した。命を救はれた恩ある大猿を撃つた猿右衛門は、丹波の國の殿様の笹山殿の御叱を受けたが、弘法大師の御訖で命は助かつた。蟹藏も蟹から奪つた小判をかへ

した。猿右衛門が銃殺した大猿の皮は笹山殿から弘法大師に贈られたので、大師は、「如是善生發菩提心」を唱へて回向なさるゝ、怪しいかな大猿の姿が朦朧として現れ、喜びの舞を舞つた。猿右衛門は一念發起して弘法大師の御弟子になつた。

これは「蟹は金猿は榮」かに かねざる さかえと言ふ小説の筋である。今から百七十八十年昔の寶曆頃に出版の小説であつて、挿繪は鳥居清信の筆である。猿蟹合戦はこの他にも小説中に取入れられてゐる。

要するに我々の祖先は、その時代時代に於て無意識的に國民童話に少しづつゝの改作を行つて來てゐる。童話の變遷からすれば、必ずしも、

「後世の書物なきから引つばつて勝手に改作するは面白くない。」

と言ふ様な主張に同意する事は出来なからう。(了)